

石仏調査ニュース

ちがさきの石仏

第10号

発行

茅ヶ崎市教育委員会
茅ヶ崎市文化資料館

編集協力

文化資料館と活動する会
(民俗行事部会)

連絡先

〒253-0055
茅ヶ崎市中海岸 2-2-18
TEL:0467-85-1733
e-mail:shiryokan@city.chigasaki.kanagawa.n
e.jp



薬師堂跡の石仏の移設

塩原 富男

赤羽根七三(下赤)の薬師堂跡に遺されていた数々の石仏が、道祖神を除き、予定されていた赤羽根三二二二(中赤)の西光寺(浄土宗)の境内に移され、祀りなおされていた。

下赤の薬師堂跡は、地元の自治会館として使われていたが、のちに会館が別の場所に新設されてからは老朽化もあって撤去されたままになっていた。

薬師堂参道の右側の小屋には弘法大師坐像や地藏尊などが、その手前には徳本塔や庚申塔が並んで建っていて、参道入口の道路沿いには道祖神が祀られていた。さらに、小屋の左側には二十三夜塔がひっそり祀られていた。

「文化三年」銘の双体道祖神は、今回の移設に伴い、同所からわずかに北にある辻の角に移され、同時に建立二〇〇年を記念して「道祖神」の碑が新設された。その碑文によると、改装の日は平成十八年十一月十四日で、氏子中として十一人の名がみえる。

この道祖神は当初、小出県道の別れ道にあったという。つまり、新たなこの場所は、道祖神の在り方として本来の姿になったと思われる。その脇に建つ碑は、まるで護衛の役割をしているようでもある。碑文を略記すると、冒頭に「道祖神 文化三年寅正月十四日(一八〇六)年建立(双体像)両神が握手をしている」と記し、建立の年代である文化文政年間については、時の天皇と將軍の名を挙げ、また当時活躍した文人として、葛飾北斎・安藤広重・谷文晁・丸山応挙・鶴屋南北・十辺舎一九・滝沢馬琴・式亭三馬・小林一茶と九人の名を記している。

ここで私感であるが、建立の時代背景の説明もさることながら、後世に残る碑であれば、人々の生活と民間信仰との関わりが希薄になりつつある昨今、「道祖神」の由来・存在理由などを明記しても良かったのではないかと、この立派な碑を前に思ったのである。



(赤羽根の道祖神と記念碑)

なお、付記すれば、円蔵の山王社前の路傍にある双体道祖神と並ぶ、鶴田あしかびの句碑「春や春 岐路に立てども 和合神」は、この道祖神を訪ねた時の吟と聞いている。徳本塔等の移設も道祖神と前後して行われ

たようであるが、移設先へ運ばれたのは一年ほど前だったという。祀りなおされた場所は西光寺の境内で、山門を入って左手墓地入口の手前の左端、宝篋印塔の左手にある。奥の徳本塔を中心にして左に二十三夜塔、右に墓塔と思われるもの(銘文などがよくわからない)、その手前に庚申塔三基、一番手前に地藏尊・弘法大師坐像、それに可愛い地藏さんが並んでいる。こうして新しく祀りなおされたのは嬉しい限りである。



(西光寺にまつられた石仏群)

ちなみに、西光寺に移設された石仏は次の通りである。

- ①徳本塔 文政三年(一八二〇)
- ②庚申塔 寛文五年(一六六五)
- ③庚申塔 元禄三年(一六九〇)
- ④庚申塔 宝永七年(一七一〇)
- ⑤弘法大師坐像 文政三年(一八二〇)
- ⑥地藏尊立像 紀年不明
- ⑦二十三夜塔 天保十四年(一八四三)
- ⑧墓塔? 紀年不明 (平成十九年四月三十日確認)

八王子みち雑感

金子 栄司

『海老名の庚申塔』(海老名市教育委員会発行、一九九六年)の中に南湖と須賀の漁に触れた記述がある。さらに、庚申塔に刻まれた道しるべ「一のみや、やバた道」が示す方向は目久尻川沿いの道であり、作場道(農道)なのである。

この庚申塔のある場所は、藤沢厚木線の海老名市本郷の「恩馬ヶ原」バス停に近いY字路(細い道を含めると五叉路)である。道しるべは用田の辻への道と、「一のみや、やバた道」の方向を示している。



(海老名市本郷の庚申塔)

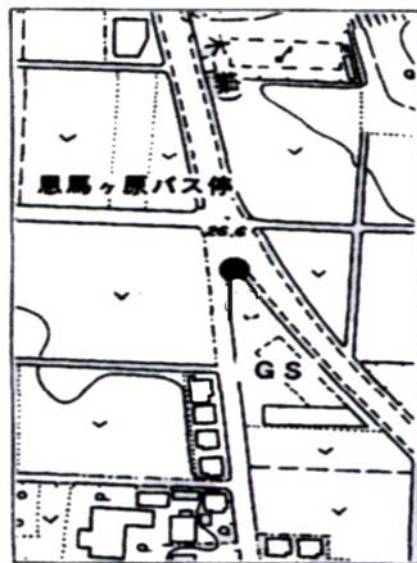
【銘文】

右面 右 一のみや
やバた 道

正面 庚申塔

左面 左 ふち澤
かまくら 道

茅ヶ崎の八王子道は、今宿を基点とする道と西久保の日吉神社前を通る道とがあり、後者は「さかな道」とも呼ばれる道である。前述の『海老名の庚申塔』によると、この塔が倒れていると茅ヶ崎、須賀が豊漁となるといわれていたので、魚屋がよく倒しにやって来たのである。



(海老名市本郷の恩馬ヶ原バス停周辺地図)

では、この二つの道と「一のみや、やばた道」はどこで結びつくのだろうか。

今宿からの道は、寒川神社で相模線沿いに北上する道と神社を挟んで東側を併走するように北上する道となる。日吉神社前の道は景観寺の東側を北上して、中原街道に出て用田から藤沢厚木線で八王子を目指す道となる。

「恩馬ヶ原」バス停から道しるべにしたがつて、「一のみや、やばた道」を地図の中で逆に辿ってみる。七〇〇メートルほど南下して柏尾通り大山道を横切り目久尻川に突き当たる。ここは用田の辻のおよそ一キロメートル西方にあたる。上流に向かえば用田橋、下流を目指せば寒川橋、橋を渡れば寒川神社があり、神社前

の道は今宿を起点とする八王子道である。また、西久保の日吉神社前の道にも通じている。

かつて目久尻川は大きく蛇行しており、その流域には耕地があった。寒川橋に通じる川沿いの道は、どの辺りを通っていたのだろうか。

萩園の三島神社を起点に寒川橋に向かい、目久尻川沿いに海老名市本郷を目指してみた。「田端」バス停にある「伊勢講成就」銘の石塔には「左なんこ道」「右馬入道」と刻まれている。ここが南湖と須賀に通じていたことを実感する。

寒川橋左岸東側の脇には「庚申石橋供養」銘の塔があり、その右面に「右 国分寺道」と示されている。道標に従えば左岸を上流に向かったことになる。その土手には雑草が密生している。

右岸を行くと、旭橋で土手の道が切れる。左折してすぐ右折すると、反対側の道端に五ヶ六基、雑然と石仏が置かれている。「奉納西国秩父板東供養」の銘があるこの塔には、「南 一ノ宮、北 国分寺道」と道標が刻んである。道はここで分かれる。その道なりに真っ直ぐ畑の中を行く。

相模川左岸水路の先は突き当たりで、正面には「地神宮」銘の石塔がある。その左面には

「南 一ノ宮、北 国分寺。旭橋際と同様な道しるべ。右側面は此方 作場道。」とある。文政十二年(一八二九)朝日(原文ママ)村からの寄進者の名が基壇三面に刻んである。

突き当たりを左に向かい、時計回りにカーブし直進すると、二〇〇メートル先の四辻の右手前の地藏堂に、石仏が七ヶ八基まとめて置かれている。どの石仏も角は丸くなり、表面は剥離して状態は良くない。塔身の下方は地中に埋まっている。二基の庚申塔の道標は、「此方 かくぶん、此方 一ノ宮」、「南 一の宮ミち、北 国分寺、東 ふし沢・鎌」と読める。

この辻を西に行くと才戸(寒川町)、東は宮原へ出て藤沢へと続く。「北 国分寺」とあることから、これは目久尻川と平行している道である。直進する道は用田橋に通じる。東海道新幹線の切通しのある辺りは、寒川町の最北東で、藤沢・海老名・綾瀬の市堺にも近い。富士ゼロックスや本郷工業団地、高座施設組合の室内温水プール、衛生センターなどが建設されて、かつての道は分からないが、本郷工業団地の真北に「恩馬ヶ原」バス停がある。

このあらましを民俗行事部会で披露したところ、『海老名の庚申塔』の編集の際に『南湖と須賀の漁』の話をしたのは私だよ。」と、T・

Tさんのご指摘をうけた。

市内の石造物(石仏)から (二)

加藤 幸一

「ちがさきの石仏」第九号(二〇〇七年四月発行)で、市内の古い石造物を紹介しました。今回は、周辺の地域にはない珍しい石造物(石仏)を紹介します。

一、杖を持った道祖神

中島の路傍にあるお堂の中に、杖を持った道祖神が祀られています。「文化三年二月吉日二ツ谷講中」と刻銘されている双体像で、男神像は短い袴を着て杖を持っており、隣に並ぶ女神像の穏やかな顔立ちに反して怒ったような表情にみえます。この男神像の左足の構えは、市内にある多くの像と違って動きがあり、珍しい形態の道祖神です。



(中島・道祖神)

『日本書紀』によると、黄泉国で妻の伊弉冉尊(イザナミ)の変わり果てた姿を見て逃げ出した伊弉諾尊(イザナギ)が、泉津平坂(よもつひらさか)で巨大な岩をもって路を塞ぎ、イザナミに「これより先は来るな」と投げつけた杖から成った神が岐神(フナドノカミ)であるといわれています。つまり、岐神は路に立って悪霊を

追い返すものとされ、そこから岐神と道祖神が習合したのでしょうか。これらのことから、この道祖神は神話の説話をあらわしたものであり、なぜ杖を持っているのかという疑問の答えにも繋がります。

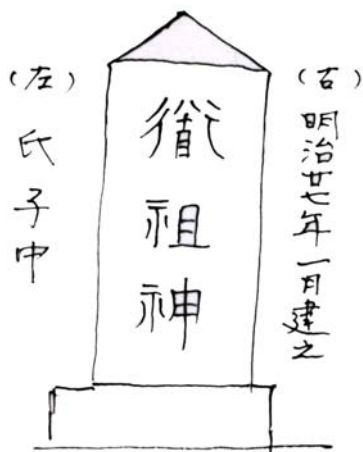


(道祖神の市内分布図)

二、変わった文字の道祖神

菱沼八王子神社の境内に、「道」の字が「衢(ちまた)」の隷書体になっている道祖神があ

ります。ちなみに、「明治二十七年一月建立 氏子中」と刻銘されています。



(菱沼八王子神社・道祖神)

この「衢」が道祖神とどう関わりがあるのかという点、記紀神話では天照大御神の孫である邇邇芸尊(ニニギノミコト)が高天原から日向の高千穂に降りていく、いわゆる天孫降臨の場

面において、猿田毘古神(サルタビコノカミ)が天の八衢(あめのやちまた)に出迎え先導を申し出ると記されています。また、『延喜式』によると、都に災厄が入るのを防ぐ道饗祭(みちあえのまつり)では八衢比古(ヤチマタヒコ)、八衢比売(ヤチマタヒメ)という神を祀っています。つまり、この道祖神碑は記紀等に記されている「衢」の文字が用いられたもので、市周辺の地域では見られない貴重な道祖神碑でもあります。

三、「猿田彦大神」の道祖神と庚申塔

前項で示した天孫降臨で先導役を務めた猿田毘古神(猿田彦神)は、その「道案内」という性質から道祖神と同一視されていきます。また、庚申の申にちなんで猿田毘古神と庚申信仰も結びついていきます。猿田毘古神の名が刻まれた碑は、市内に三基あります。

そのうちの一基は、柳島海岸の巖島神社(通称弁天さま)の境内にあります。天保八年の建立で「猿田彦大神」と刻銘された道祖神です。



(巖島神社・道祖神)

また、下寺尾の白峯寺にある「猿田彦大神」と刻銘された碑は、明治十二年二月建立の庚申塔です。猿田毘古神は道祖神、または庚申塔として祀られており、地域によってその違いをうかがうことができます。

四、帝釈天像の庚申塔

南湖二丁目の個人宅地内の道路側に、庚申塔が三基あります。その中の一基が柴又帝釈天板本尊々形の庚申塔で、全国的にみても珍しい貴重な庚申塔ではないかと思われます。

東京都葛飾区にある日蓮宗の経栄山題経寺は、通称「柴又の帝釈天」として親しまれ、映画『男はつらいよ』シリーズゆかりの地として有名です。本尊は、日蓮上人が自ら刻んだといわれる帝釈天像で、板本尊と呼ばれています。この本尊は一時所在不明となっていました。本堂を修理した際に発見され、そのときがちょうど庚申の日であったことから、庚申信仰と結びつき、庚申の日には縁日がたつようになったといわれています。

この南湖にある庚申塔には、右手に剣を持ち、左手を開いた忿怒の相をあらわした帝釈天が彫られています。建立年は不明ですが、像の上部には「帝釈天」との文字が刻銘されています。



(南湖・柴又帝釈天板本尊々形の庚申塔)

五、**狛犬か獅子か**

狛犬は邪を退け、神前守護の意味をもつとして、神社の社殿前や参道に置かれています。また、左右一対で、一方が口を開け、もう一方は閉じているという「阿吽」の形態が一般的です。南湖中町の八雲神社の狛犬は、岩石上に置かれており、その様相から狛犬というより岩獅子と呼んだ方がよいのではないかとも思います。これは昭和五年の建立のもので、奉納者の地域名を見ると、地元の中町・上町・下町はもちろん、浅草・横浜・横須賀・腰越・大井・平塚ともあり、神社と地域の関わりの広さがわかります。



(帝釈天王御尊影)

岩石上の獅子は親子でしょうか。まるで獅子の子落としを連想させる情景です。親から突き放された子獅子が必死になって岩をよじ登る様子を厳しい表情で見ている親獅子のその姿は、見る人によって異なる想いを抱かせることでしょう。

関東で有名な岩獅子としては、成田不動(千



(南湖八雲神社・狛犬)



葉)や神田明神(東京)のものがあります。それをふまえた上でも、南湖の八雲神社の岩獅子(狛犬)のように、前者に劣ることなく、ふくよかな体型の中にも厳しさを感ずる狛犬は大変珍しいと思います。



(千葉成田山新勝寺・岩獅子)

市内にある二十五対の狛犬の中で、動きのある狛犬は、この八雲神社のみですが、これに似た親子獅子の像が堤の浄見寺で見ることが出来ます。

西久保「北向地藏」初代と二代目

飯岡 英仁

現在の北向地藏はいわゆる「二代目」のもので、文久二年(一八六二)に再建されたものです。なぜ再建されたのか、初代のはどこに行ったのか疑問に思い、時間をかけて探してみました。



(「二代目」北向地藏)

初代の地藏菩薩は、宝生寺の山門右手にありました。道標は境内に横向きに安置されていました。その拓本を取って調べたところ、「宝暦七年(一七五七)」と何とか読み取ることが出来ました。なぜ再建されたのか考えるに、まず

初代は建立してから百年が経ち老朽化していたためと思われます。次に、再建当時の北向地藏があつた辻は人通りが多く、大変賑わつたそうです。そのため、二方向の道しるべでは不便を感じた親切な村人が一方方向を追加し、道しるべを三方向にして再建したのと思われまふ。



(宝生寺山門・「初代」北向地藏)



(「初代」道標)

【銘文】

初代

正面 右 子之権現道

左 南湖道

左面 宝暦七丁丑歳十一月十一日

地藏講中

二代目

右面 相奘高座郡西久保村

念仏講中

正面 右 子之権現

北 一之宮 道

左 南湖

左面 文久戌年十一月二十一日再建

異体字・続(二)

樋田 豊宏

以前の「ちがさきの石仏」第八号(二〇〇五年三月発行)にも、思い着くままに異体字について書きましたが、今回新たに幾つかあげてみ

たいと思います。

「霧」の字が使われていたものは、小田原久野の東泉寺に「萬霧塔」と刻された万霊塔がありました。同じく早川海蔵寺(一夜城の合戦で討死にした堀政の墓がある寺)にもありました。開成町吉田島の大長寺には「三界万霧塔」と刻銘されたものがあり、厚木市飯山の金剛寺の法篋塔には「萬霧」とのみありました。藤沢市鶴沼四丁目には「溺死者霧」と銘のあるものがあります。これは下大井町泉蔵院や竺土寺、東泉寺にもあります。また、三島市にも「万霧塔」と刻銘されたものが沢山あります。真立寺には一つ、東通寺には二つ、妙泉寺には十七、さらに匡王寺、恵明寺にも二つあり、大場の光明寺には「三界萬霧」と刻されたものがありました。また、本覚寺には延宝四年建立の石塔に「…霧」との銘がありました。

「霧」という異体字について、海老名市中新田の海源寺や三島市本覚寺のものは前々号において書きましたが、その他として次のものがあげられます。

まず、平塚市広川の善福寺にある飼い犬(ポチ)の墓に「霧」の銘があり、小田原酒匂の法船寺や同じく酒匂の弘経寺、下大井泉蔵院にもあります。なかでも南足柄市天王院では今も

使われていて、昭和十年、十四年、二十二年建立の比較的新しい時代のもが沢山あり、全てで二十五の墓石に「霧」の字の銘があります。さらに、「今」という「今」の字を鏡文字で表したような異体字が、海老名市中新田の海源寺にある今福家の墓石と、平塚市上平塚宝積寺にあります。

他の異体字についても挙げてみると、例えば「三」の字は「弐」と表されます。これは、厚木市沼水の熊野神社にある日露戦争の記念碑に「明治弐拾七・八年」と刻されていました。また、木曾谷の大鹿村定勝寺の庚申塔には「弐尸虫」とあります。開成町の大通寺のお堂にも「弐」とあり、また茅ヶ崎市萩園三島神社の大正大地震の碑にもありました。

次いで、「一」の字につきましては、「弍」と表されていることがあります。これは宗教的にみると時宗の寺に多いようです。それもご婦人方の戒名に多いようです。相模原の当麻山無量光寺の墓にあり、「弍院」という院号が付いています。藤沢の遊行寺の墓石にも多くみられます。

「四」の字は、死を連想させることを忌み嫌うので「三」と表しています。本村の海前寺の柘碑の中に「嘉元三年(一三〇六)とあり、ま

た厚木市沼水の熊野神社の石灯籠にもありません。

「化」の字は「化」と書き、偏とつくりを上下に合わせています。大磯の東光寺には「弘化元年」と刻されたものがある。これは大磯の地福寺にもあります。

「畧」は「界」のことで、扁とつくりが左右に書いています。湯河原海岸の英漸院にある三界萬霊塔に刻されています。

「忝」は「松」で、これも偏とつくりを上下に分けています。芹沢大久保の四松稻荷にある幟旗にこの「忝」が使われていました。

「謙」は「善」と読み、今のところ三ヶ所を把握しています。これも古い字を知っている人が書いたものでしょう。まず一つ目は、香川の浄心寺の山門を入ってすぐ左手に三本の石塔があり、その中心の石塔に刻されています。二つ目は堤の妙伝寺に最近建立されたもの、三つ目は山宮藤吉が南足柄の宝福寺にある松川家の墓碑に刻した戒名などがあります。この松川家は、今はこの土地に住んではいません。昔、松田の街中に出て薬局をやっていたといいますが、今はそこにも居ないようです。

さて、字というか記号というべきか。禪宗の石碑の最初の書き出しにあるもので「ウハツキ

ユウ」と発音するものがあり、その書き方が三通りあります。

まず、「白八鳥」と書くものが、小田原久野の東泉寺、海蔵寺、南足柄の極楽寺などにあります。

「鵠」は、つくりは「白」、扁に鳥と書きま

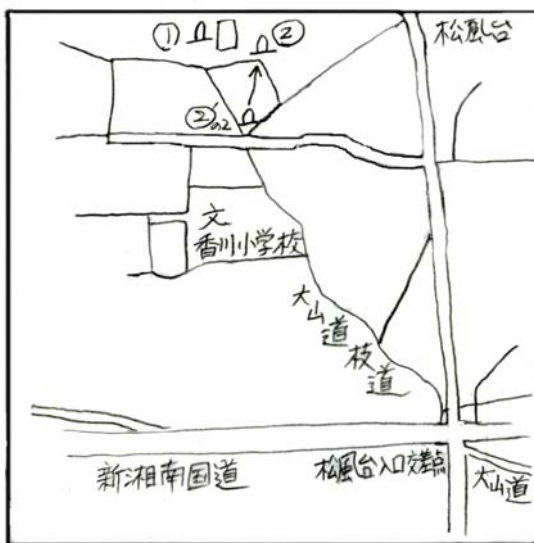
す。小田原市国府津の小船の広濟寺や湯河原の英潮院にもあります。また、「谷鳥」と縦に並べるように書くものが、秦野の大岳院に二つあります。

香川の馬頭観音

池田 卓郎

大山道の枝道といわれる道沿いの家に二基の馬頭観音があることが分かり、地元の言い伝えによる二基と合わせると、香川の馬頭観音は四基となりました。今回明らかになった二基は、香川二丁目の中尾(仲尾とも)と呼ばれる土地に、昔から続く農家の庭と門口にありました。中尾は香川小学校の北側にあたる一帯の地名です。

二基のうち、庭にある石塔(①)はいいたみがひどく、わずかに「観」の字の一部が読み取れるだけでした。

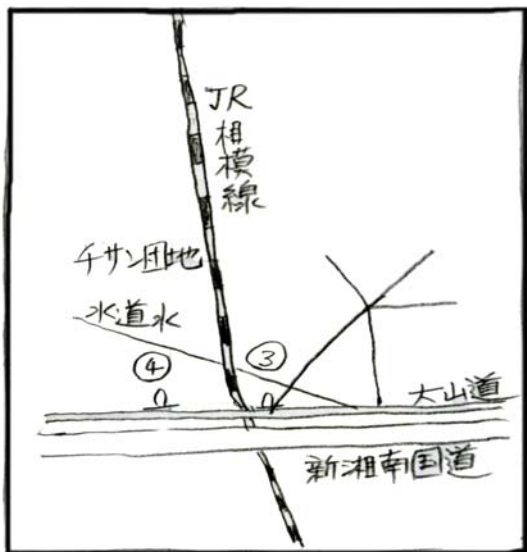


もう一基(②)は、銘に「馬頭観世音 昭和二十年 熊澤健之助建立」と記されています。今は、この家の門口にあります。建てられた当時は少し南の五叉路になっているところの北側の角に置かれていました(②の2)。当時、その場所は今より一メートル以上小高い土地でした。高さは、北東(松風台方面)に行く道に沿って松風台の南公園まで、北側は家の近くまで続いています。これは砂丘の一部と考えられ、香川の諏訪神社や玄珊寺などと同じく、

茅ヶ崎の海岸から7列目にあたる砂丘列の南端と考えられます。その南の先端は、甘沼や大山街道に通じる道の門になります。つまり、昔の香川にとって大切な道路に面して建てたものなのでしょう。

この家の当主の話では、庭にある塔は今の家に建て替える前から同じ場所にあったといえます。

香川にはこの他に二基の馬頭観音があったことが伝えられています。二基とも大山街道沿いです。相模線の踏切をはさんで、それぞれ東と西へ三十メートル位の距離のところにあつたといわれています。



東側の塔(③)は、踏切より東へ二十メートル位のところに大山道より香川の集落へ向かう道がありますが、その角にありました。直径三十cm位の大きさの石の他に、二、三の小さな石がかためてあり、そばに高さ六十センチメートル程の松の木が生えていました。文字が刻まれた石は昭和三十年代にはなかったようです。

その場所について、大正三年生まれの人は「観音さん」と言い、その父親である明治十九年生まれの方は「馬頭観音」と言っていました。西側の塔(④)は、間門に住む、現在八十代の人の話によると、踏切より三十センチメートル位西に進んだところにあたり、そこには昭和四十年代に自動車関係の仕事場がありました。が、その土地の道沿いにあつたということです。

「庶民の本音」を知るために

須藤 格

(文化資料館)

現在、文化資料館では、市民ボランティアの方々の多大なるご協力のもと、市域の石仏調査

を行っています。今後、本調査研究の結果を「茅ヶ崎の石仏(仮)」として報告を行うことで、文化資料館の教育普及活動や「ちがさき丸ごとふるさと発見博物館事業」などへと活用される事が期待できます。

そもそも石造物たち(以下、石仏)の建立者の多くは、当時の庶民階級に属する人々でした。彼らの心の拠り所でもあつた信仰、いわゆる民間信仰は、その表現様式が無形であるため記録にとどめられていることが少なく、その中でも石仏は、近世の庶民信仰の一部が表象されたものとして捉えることができるのです。石仏を調査することで、当時の庶民の精神的な営みといえる「庶民の本音」を知る手がかりを掴むことが本調査の目的なのであります。

石仏を造立するという信仰行為は、近世から近代にかけての一時代にみられる特徴的で独自性のあるものです。かつて石造物の建立とは、支配階級による重要な宗教行為のひとつでした。それが庶民階級に移行し、その結果として誕生したのが近世石仏といわれるものです。当時の人口の大多数を占めていた庶民が建立者となったため、その数量は膨大であり、造形表現も素朴な様式のものが多くみられます。

信仰を石で表現するという文化は、近世前期

に突如出現しました。そこから広範囲に普及し、普遍的なものとして定着していくのです。その傾向は、市内の石仏の統計結果(須藤格著「茅ヶ崎の石仏統計分析報告」(『文化資料館調査研究報告十五』、二〇〇七年)において導きだすことができました。

現在の石仏調査では供養塔の調査も行っていますが、それは個人墓域外のものに限定していません。しかし、「庶民の本音」を知る上で欠かせないものが近世墓標の調査にあるのではないかと考えています。庶民が墓標を建立する行為は、長い墓制の歴史からみると、そう古くはありません。しかし、その短い歴史の中でも大きな変化がみとれます。そこから読み取れる事柄は、近世史の内容を補強するばかりではなく、文献資料のみでは明らかにできない「本音」を知ることができるのではないかと思います。また、墓標は考古学的資料としても豊富な情報を有しているのです。

今後、石仏調査で得たノウハウを活かし、五輪塔や宝篋印塔をはじめ、板碑型、舟形光背型、角柱型などへと変化していった近世墓標の調査を行い、「庶民の本音」が表象されるという石仏建立の文化の出現とその定着について、より明確に把握することに繋がりたいと考えてい

ます。市内石仏調査の次なる段階へむけて、引き続き市民ボランティアの方々とともに、地域の目線から墓標の調査・研究活動を展開していきたいと思えます。

〈編集後記〉

今回も皆さまからたくさんのご投稿をいただきました。まして、「ちがさきの石仏」第十号を発刊するにいたりました。そろって熱心な執筆に感嘆させられるばかりです。ここに感謝の意を述べさせていただきます。

塩原氏は、市街地の区画整備が進みゆくなかで新しく祀りなおされる石仏をあげています。信仰心が希薄になっていくといわれる現代社会においても、このように再建を遂げる姿からは、人々の心に深くとけこむ信仰の姿がみとれるようです。

金子氏は、『さかなみち』と名前がついているが、本当にあの場所から魚を運んでいたのだろうか」という疑問から、道標に示された道を現在の道と照らし合わせて検証しています。

加藤氏は、市内にある珍しい石造物を紹介しています。このように全国的にもみても特異性

のある石造物があるということは、それだけ茅ヶ崎における石仏信仰が盛んであったということがうかがえます。

なお、補足すると、なぜ道祖神が境の神である塞神(サエノカミ)としてとらえられていったのかというと、『和名類聚抄』という平安時代の辞書には、「道祖」という項目にその別名として「佐部乃加美(さえのかみ)」と書かれてあります。道祖とは旅の安全を祈願する中国の行路の神のことです。その行路の神という性格から境を守る神と重ね合わせられたと考えられています。また、地藏信仰が広まることにも、この世とあの世の境に立って死者を救うという地藏菩薩がサエノカミと重なり、こちらも境の神として一般に普及していくことになりました。

飯岡氏は、再建前のものが現存している地藏菩薩に注目し、その道標の内容が再建時に追加されたことを示しています。両者の銘文の違いから当時の賑わいが伝わってくるようです。

樋田氏は、前々回に引き続き、特異な異体字が表記されている石造物を、市内のみならず市外にまで足を延ばし広く紹介しています。

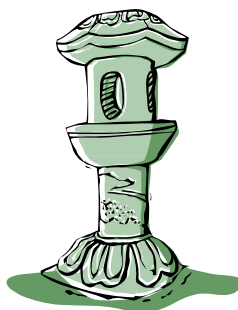
池田氏は、香川で新たに発見された道祖神について報告しています。このような発見に巡り

あうと、市内に人知れず眠っている石仏がまだあるのではないかとという期待に胸が躍らされます。しかし、移り変りの激しい昨今の住宅事情のなかでは、同じ土地で眠り続けるという状況も難しくなっています。

人々はなぜ石や自然から生み出されたものに畏敬の念を抱くのでしょうか。それは、すべてのものに魂が宿るといふ精霊信仰、いわゆるアニミズムの精神が、日本人の心のなかに深く根付いているからでしょう。

このように、石造物からは人々の心の拠りどころであった神さまの姿を垣間見ることができ、そこから地域の人々による民間信仰をみてとることができます。しかし、急変する時代の流れの前においては、石造物もその様相を変えざるを得ません。心苦しい現状ではありますが、その変化の流れを見定め、次世代へ歴史の精神をつなげるバトン渡しも、現在を生きる私たちに託された役目なのではないでしょうか。

（文化資料館 芦葉抄苗）



〈お知らせ〉

茅ヶ崎市文化資料館では、市教育委員会と連携している民俗資料を、市民ボランティアの皆様と協力して、調査・整理・保存・展示などの活動を行っています。

その一環として、長年に渡り石仏調査を行い、市内に点在する石造物一、〇三九点（二〇〇七年三月現在）を把握するにいたりました。現在、その調査カードをもとに、調査研究報告書の発行にむけて、採寸項目の見直し、石造物のスケッチ図の作成、銘文内容の再確認等の作業を行っています。

資料の整理は毎週木曜日、また石仏に関するフィールドワークなどを毎月第三金曜日に実施しています。ご興味のある方は、ぜひご参加ください。

※ ご不明な点等ございましたら、一面に記載しております連絡先にご連絡ください。



「石仏調査の様子」